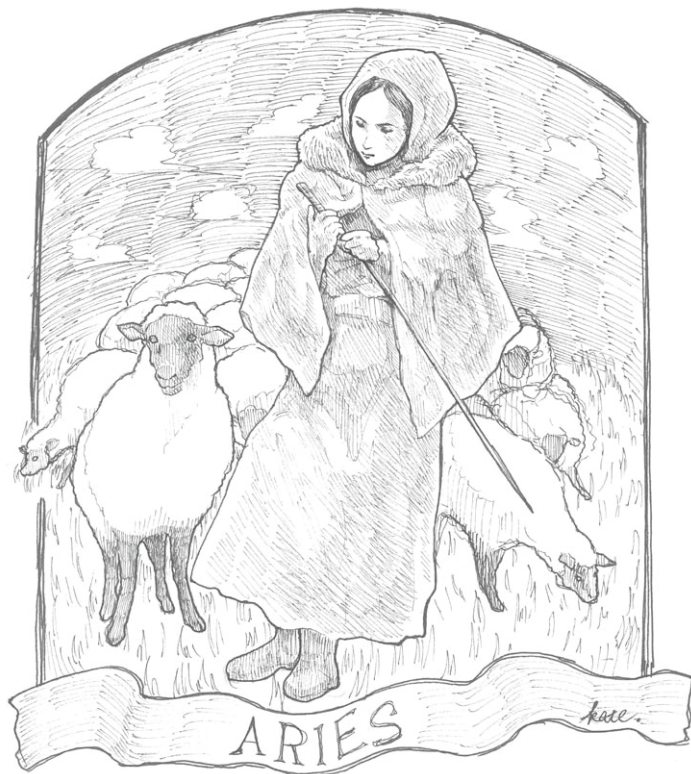




話題の本棚

カロリン・エムケ著、浅井晶子訳『なぜならそれは言葉にできるから 証言することと正義について』
アンリ・ミトラン校訂・解説・注、吉田典子・高橋愛訳『セザンヌ=ゾラ往復書簡 1858-1887』

特集／故郷

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2 階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyoku/public_relations/

 **univ.** 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

「言葉にできない」「ものを」「言葉にする」ために

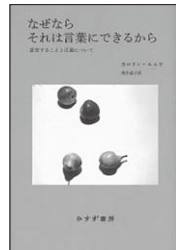
なぜならそれは

言葉にできるから

証言することと正義について

カロリン・エムケ著

浅井 晶子訳 みすず書房



「言葉にできない」、「想像を絶する」、「理解を超えている」……。
 途方もない暴力について語るとき、こうした言葉はほぼ常套句と化している。それにしたし、世界各地の紛争地を取材するジャーナリストである著者エムケは「それは言葉にできる」と主張する。ただし被害者ではなく、被害に遭わなかった人たちにに向けて。

語りの断絶

暴力の被害者は、その体験を理解できず、だからこそ語ることもできないという状態に置かれる。「絶望と痛みは、まるで果物の皮のように、それを体験した人を覆い、閉じ込めてしまう」。それゆえ精神分析家ドリー・ロープは、ホロコーストを「証人なき出来事」と見なす。また哲学者アガンベンは、収容所のなかで人間性を奪われて語ることができなくなった者を「ムーゼルマン」と呼ぶ。つまり暴力によって人間としての存在が破壊されてしまった者は、自分が受けた被害について証言することができないということだ。

しかしエムケは、暴力が人間から言葉を奪うことについてはもちろん認めながらも、証言することの可能性を根本から否定するこうした理論を批判する。暴力の体験を語りえないものと見なししてしまうと、被害者は自分の体験をひとりて抱えたままでないなければならない

ないからだ。そこで、ロープとアガンベンが副次的な問題だと考えていた、「語りが向けられる相手」の役割にエムケは注目する。

「それでもなお語る」ために

ロープやアガンベンと同じくホロコーストを体験した文筆家ジャン・アメリーは、最初の拷問によって「世界への信頼、とても言うべきもの」を失ったと語っている。アメリーのこの言葉を受けて、エムケは証言における「信頼」の意味を転換してみせる。通常は証言における信頼とは、被害者の言葉が信用に足るものかどうかという文脈で用いられることが多い。しかしエムケは、「暴力の被害者のほうが、聴き手の信頼に値することを証明せねばならないのではなく、被害を免れた者のほうが、被害者の信頼を勝ち得るために努力しなければならない」という。被害者が「それでもなお語る」ためには、そこで語られる言葉を聴く者の態度が肝心となる。

エムケは一見支離滅裂な証言の例として、セルビア政府に拷問を受けた脱走兵の証言を取りあげる。彼の話は、まったく関係のない「新しい靴を買った」というエピソードから始まり、拷問の話に入る前にいつもそこへと逆戻りしてしまう。理路整然とした、客観的な証言とはとても言えない。だが語りの混乱は、世界への信頼を失った語り手自身の混乱を反映している。語りの断絶は、これまでの世界との断絶を。それらを斥けず聴きとるのが聴き手の役目だ。

「なぜならそれは言葉にできるから」——そう言い切るためには、聴き手こそが語りを可能にしなければならない。この言葉は語る者への約束であり、語りが生まれる可能性への希望だ。

(二八八頁 本体三六〇〇円 10月刊)

セザンヌとゾラの友情と芸術の軌跡をたどる

セザンヌとゾラ

往復書簡

1858-1887

アンリ・ミトラン校訂・解説・注
吉田典子、高橋愛訳 法政大学出版局



本書は、一九世紀後半のフランス自然主義を代表し、「ドレフェュス事件」においてアルフレド・ドレフェュスの無罪を主張し、死後は国葬されたフランスの国民的作家エミール・ゾラと、彼の少年時代からの親友であり、「近代絵画の父」として二〇世紀の美術に多大な影響を与えた画家ポール・セザンヌとの現存する全ての往復書簡の邦訳版である。

南仏の町エクス・アン・プロヴァンスの中学校で出会ったこの二人の芸術家の交友は、世界的なゾラ研究者であり、フランスのゾラ研究を牽引してきたアンリ・ミトラン（この往復書簡の原書版の編纂者でもある）の言葉を借りれば、「その相互理解の性質と持続性において、比肩できるものは何もない」稀有な友情だった。しかしながら、この二人の晩年の友情に関しては、セザンヌも主人公のモデルのひとりだとされるゾラの芸術家小説『制作』の出版以降、途絶えてしまったというのが美術史におけるこれまでの定説だった。

今まで往復書簡という形で出版はなく、セザンヌ研究者によって画家の書簡集が、ゾラ研究者によって小説家の書簡集のみが出版されるばかりだった。しかし、近年のゾラ研究により、二〇二三年に、それまで友情が既に途絶えていたとされていた時期である一八

八七年にセザンヌからゾラへ宛てた新たな手稿が発見され、過去の定説が覆されることとなった。そうした新たな研究成果を反映する形で、本書簡集の原書版は二〇一六年に刊行された。

南仏エクスの中学校時代にジャン・バティスタン・バイユとともに「三人組」を作り、強い友情で結ばれたセザンヌとゾラ。技師であった父を幼くして亡くしたゾラは、バカロレアの受験を前に家族とともにパリへと移り住む。その頃から二人の文通は、パリとエクスの間で開始される。その書簡からは、ロマン主義へと傾倒した少年時代の小説家と画家の夢や恋、友情についての青春の記録を読み解くことができる。二度のバカロレア受験の失敗後、パリでボヘミアンの生活を過ごしていたゾラは、絶えず画家を勇気づけ、それに対して画家は巧みな脚韻を駆使した詩を綴った手紙で応答する。

こうしたゾラとセザンヌのやり取りを通して、我々はこの稀有な画家と小説家の伝記的な事実に興味を向けがちであるが、編纂者のミトランが強調するように、この往復書簡を通して、作家や画家がいかにして自分たちの制作のスタイルを確立していったかに関心を向けることがむしろ重要ではないだろうか。

作家と画家の死後二世紀を越えてもなお、今日この二人の芸術家に対する興味は尽きることがない。そして折しも先日、日本におけるゾラ研究の第一人者である小倉孝誠氏によって、ゾラの新たな手紙が発見されたばかりである。この往復書簡集が日本の優れたゾラ研究者の見事な邦訳により刊行されたことの意義は計り知れない。本書は新しい発見の可能性に満ちた往復書簡である。（投稿・M・N）

（五五八頁 本体五四〇〇円 10月刊）

津軽

太宰治著
新潮文庫

生まれ故郷のことを書いてみないか——。太平洋戦争中の昭和十九年、太宰治は出版社の執筆依頼を受け、三十五歳の時に三週間ほど郷里・津軽の取材旅行をする。その時の経験を基に生まれたのが本作品だ。



ご存知の方も多いかもしれないが、太宰は青森の名家に生まれながらも、心中やら自殺未遂やら様々な騒動を起こした挙句、遂に実家から勘当されることになる。十年近くに渡って津軽の土を踏まない時期もあるなど、故郷からはすっかり縁遠くなってしまった。そんな彼が自身の原点となる土地を旅したことは、生涯で「かなり重要な事件の一つ」であったと述懐している。

太宰は、家族のことを単純に好きか嫌いかの二分法で語ることが出来ないのと同様、「はめていいのか、けなしていいのか、わからない」のが故郷だと吐露している。彼がかつて郷里への言葉を求められた際に、「汝を愛し、汝を憎む」と答えたことにもその思いが表れている。本書では、行く先ごとに酒盛りをしつつ、津軽の寂寞とした美しさや愛すべき津軽人、そして太宰自身の心情が、軽妙なユーモアを利かせながら、時にはどきりとするような本質を突いた文章で描かれる。故郷を悪く言いつつも、「なんとと言っても、私は津軽を愛しているのだから」と断るところに太宰の人柄が表われており、何とも微笑ましい。

本編には手書きの地図も収録されているが、詳細な地図帳を片手に太宰の道程をなぞっていくと、より一層彼との津軽巡りが愉しめるだろう。そして、読み終わった後には、あなた自身も故郷再発見の旅へと出掛けたいくなるに相違ない。

(はるな)

(260頁 本体430円)



特集

故郷

「ふるさとには遠きいありて思ふもの」と室生犀星が詠ったのはおよそ百年前。現在は飛行機や新幹線のおかげで帰省が格段に楽になった上、地元の親や友人と容易に連絡が取れるようになり、故郷との距離感はずんと縮まったと言えます。それでは、故郷との関係性は本質的に変わったのでしょうか。今回、故郷というテーマを扱った本に加えて、編集委員の郷里を紹介した本を選書しました。貴方にとって、故郷とは何ですか？

(はるな)

桜の森の満開の下・白痴

他十二篇

坂口安吾著 岩波文庫

自分の故郷が舞台となった小説を読むのは、なんとも変な感じがする。馴染みの場所が作家の想像力に彩られ、まったく知らない場所に変貌してしまう。表題作『桜の森の満開の下』では、登場人物の名前も時代設定も明らかにされないなか、舞台となる地名だけが具体的に示される。そこは鈴鹿峠。滋賀県と三重県の県境をなす鈴鹿山脈の峠で、山賊の横行する、東海道有数の難所であった。

街道を通る者を襲い、着物をはいでは時に殺した山賊の男。そんな彼にも恐ろしいものがあつた。それは鈴鹿峠の桜の森。「花の下では風がないのにゴウゴウ風が鳴っているような気がしました。そのくせ風がちっともなく、一つも物音がありません」。この世のものとは思われないほど美しい桜の下にいと、男は気も狂わんばかりになるのだつた。

ある日男は美しい女を連れ帰るが、その女には残忍な趣味があつた。女のわがままで都に移り住んでから、女は每晚人の首を斬ってくるよう要求した。集めた首でごっこ遊びをする女。その要求に応えつづけることにも都での暮らしにも男は嫌気がさし、女を背負ってふたたび峠へ帰ることにする。季節は春。冴え冴えとした空気の張りつめた桜の森に差しかかったとき、男はあるものを見る……。

難所と呼ばれた峠にはいまや国道一号線が通っている。旅人の往来を見守ってきた常夜灯が、役目を終えて静かに国道を見下ろしている。わたしの知っている鈴鹿峠は、安吾の描いた桜の森とはほど遠い。そこは冷たく妖艶で、残酷で美しい。いま、鈴鹿峠に桜は咲いているだろうか——自分の知らない故郷の顔に、背筋の寒くなる思いがする。（ミセ）

(401頁 本体910円)

東京の自然史

貝塚爽平著

講談社学術文庫

大都市周縁の、近代以降に都市化した地域に育った者にとって、「故郷」とは実感の伴わない概念であろう。例えば、東京二十三区の西側には住宅地が広がっているが、そこには江戸の文化はなく、かといって郊外のように山や川が残っているわけでもない。風景自体も再開発で失われてゆく。とにかく、自身の幼いころを思い出すための象徴に乏しいのがこの地域の特徴である。

しかし、それでも過去を思い起こす縁となるものはある。それは、地形・地質といった容易には人為により改変されない「自然」である。本書は東京の地形に関して解説した入門書であり、その特質や形成の歴史が詳細に述べられている。こうした体系的な知識を踏まえて、小さい頃の様子を思い出してみると、いかにそれが東京西部に特徴的な地形・地質と分かちがたく結びついているかが実感される。例えば、冬の朝には霜柱を踏みながら歩いたものだが、これも土壌が火山灰質だから生じやすい現象であり、京都近辺で見かけることは少ない。そこら辺を掘り返して出てきた粘土で遊んでいた記憶もあるが、これも地質と深く関連している。また、近所には坂道が多く、その「谷」の辺りには薄暗く湿った路地があつたが、こうした風景も、小規模な河川により刻まれた台地であるという地形的な条件によるものである。こう考えてみると、懐かしく思い出す山河も文化もないとはいえ、それなりに地方性はあつたように思われる。

馴染みのある土地の地形について、改めて知することは興味深く、また防災上も有用であろう。東京に関わりのある人にはぜひ本書の一読を勧めたい。

(蔵餅)

(336頁 本体1080円)



阿Q正伝

魯迅著 増田渉訳
角川文庫

これが、故郷……？ 眼前の景色は、記憶の中のそれとは似ても似つかない。でもそれは、悲しいことではない。魯迅『阿Q正伝』所収の「故郷」を読んで、我が故郷を思う。



「ああ、これは僕が二十年来思い続けてきた故郷ではないだろう。」——久方ぶりに帰郷した「僕」は、かつてのように美しくはないその町に落胆する。今回の帰郷の目的は、古い家を明け渡して、家族を自分の家に連れて行くことだ。一緒に住んでいた親戚達はもうおらず、八歳になる甥の宏児（ホンアル）だけが飛び出してくる。

閩土（レントー）が会いたがっていた、と母が言う。彼は年末や節季のときだけ来ていた雇い人の息子である。数日後には、その閩土が訪ねてやって来た。閩土。何を話そう。彼に何を話そう。挨拶の言葉さえ出てこない。そんな「僕」に、彼ははっきりこう言った。「旦那様！……」これが、故郷……？ こんなはずじゃなかった。閩土。二人の間は、すでに「悲しい厚い壁」で隔てられていることに「僕」は気づいた。貧困にあえぐ閩土に、自分らの不用品はすべて与えることにして、「僕」は母と宏児とともに故郷を去るのであった。遠ざかる故郷を前に、「僕」は思う。「希望とは本来あるとも言えないし、ないとも言えない。これはちょうど地上の道のようなもの、実は地上に本来道はないが、歩く人が多くなると、道ができるのだ」と——。

故郷はある種の幻影で、その人の記憶の中にしか存在しないのかもしれない。記憶の地図を頼りに、私は私だけの「故郷」を探し続ける。それでは次に、故郷をめぐる「旅」の話を見てみよう。

（出席点）

（240頁 本体640円）

丹下健三 伝統と創造

瀬戸内から世界へ

北川フラム監修 美術出版社

日本を代表する芸術祭、瀬戸内国際芸術祭。その成功を生み出した土壌は建築だった。直島の地中美術館（2004）よりも遙か昔、広島平和記念資料館（1955）や代々木競技場第一体育館



（1964）を設計し、戦後日本を代表する建築家となった丹下健三の傑作、香川県庁舎（1958）なくして、「アートの県」としての香川県はない。

本書は、丹下健三の生誕100周年にあたる2013年に香川県で開催された回顧展の公式カタログであり、香川県庁舎建設当時のエピソードが掲載されている。当時の香川県知事、金子正則は宇高連絡船の船室で、「民主主義の時代に相応しい庁舎を建てたい」と丹下に熱く語ったといい、空襲で愛媛の母を失い、旧制高校生活を過ごした広島を原爆で破壊された丹下は、この依頼を快諾したという。

戦前、公共建築の多くは西洋の様式建築を参考にしており、市民が近寄りたがたい雰囲気醸成していた。対して丹下は、市民に開かれた公共の場としての県庁舎を目指して設計を開始した。「飾るためでもなく、眺めるだけでなく、人々が集う」ために常に解放された南庭やピロティ、ロビーや屋上を備え、清水の舞台を連想させるような日本の伝統的建築表現とコンクリートを用いたモダニズム建築表現が融合した香川県庁舎は、戦後日本の公共建築における普遍的モデルとなった。

瀬戸内国際芸術祭の成功の要因は、大物芸術家がトップダウンで運営するのではなく、香川県民を中心とするボランティアが積極的に運営していることだという。人々の集う場は作るが、口は出さない。丹下らの残した県庁舎以来の公の^{おおよそ}大らかさが、私の故郷、香川県には残り続けて欲しい。

（石透）

（380頁 本体3143円）

地球にちりばめられて

多和田葉子著
講談社

そういえば昔海外にいた頃、日本語を思いっきり話したいと思ったことがある。言語を一つの仮面とするならば、日本の仮面を久しぶりに被りたいと思ったのだ。帰りたいとはまた違った、語りたいという郷愁がそこにはあった。特集の最後に言語と故郷をテーマにした本書を紹介しよう。



主人公 Hiruko はスウェーデン留学中に母国が消滅してしまったことを知る。帰れなくなった彼女は留学期間を延長するためノルウェーに滞在し、その後職を見つけるためにデンマークに来た。短い期間に三つの国をまたいだ彼女はその過程でスカンジナビア半島周辺に通じる〈パンスカ〉という独自の言語を作った。たどたどしいが意味は通じる〈パンスカ〉は、長く同じ場所に滞在できない現代の移民の生きる知恵だった。

そんな Hiruko は自分と同じ母語を持つ人を探す旅に出る。言語学の研究者クヌート、インド留学生アカッシュ、博物館員ノラを巻き込んで進んで行く旅は、言語とアイデンティティーをめぐる冒険である。ただ会って話したい、自分と同じ言語を持った人と思いきり語りあいたい。そんな目的で始まった旅は故郷を偽る男テンゾと、謎の男 Susanoo の登場で急展開を迎える。

本書ではなぜ故郷が消滅したのかは明示されない。あるのは故郷を失った人間の直面する壁であり、旅の中で結びついていく人間の縁である。重い話はずなのに、多様な価値観で描かれる物語はコミカルでもあった。母語や母国の喪失と再認識。誰もが移民になりえる時代、言語と地域の繋がりを新しく考えさせてくれる一冊。

(きもの)

(314 頁 本体 1700 円)

放浪記 復元版

林芙美子著 廣畑研二校訂
論創社

故郷とは何だろうか？
毎年お盆の頃には帰省の話題が出る。親戚や地元の知人と再会する、先祖の墓参りをするなど、故郷とは血縁・地縁などの繋がりを再確認する場所といえる。それは誰もが持つものなのだろうか？



本書の著者、林芙美子はそれこそ「故郷を持たない人」であった。行商人の父と、その父に連れ添ったために故郷を放逐された母。著者芙美子自身の生地も定かではない。そして父の浮気と共に別の男性と芙美子母子は九州中を行商して回る。その後定住した尾道は東の間の故郷といえるだろうか。そこで出会った初恋の相手を追って、女学校を出た芙美子は上京する。東京でも芙美子は住所・職業を転々とする。そして恋の相手も。本書には等身大の彼女の人生が、激しいともいえるほどの情感豊かな言葉で書き綴られている。

「私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない」という有名な冒頭の言葉のように、抛り所を持たずに生きる彼女は、「〇〇が食べたい」や「好かれない」と自らの欲求を率直に表現する。というよりも、欲求として表現する自身の生こそが彼女の精神的抛り所だったのかもしれない。「旅が古里である」と言う彼女なら、自身の旅を書いた本書こそが故郷ともいえるだろう。

『放浪記』という作品自体、初出の雑誌掲載から単行本、文庫化となる間に検閲や著者自身による修正が加えられてきた。文章そのものが「放浪」しているともいえよう。今回評者が選書したのは復元版だが、既刊の各種『放浪記』と比較して文章の遍歴ぶりを見ると、そこから窺われる著者の面影もまた変化していることがわかるだろう。

(ねこ)

(363 頁 本体 3800 円)

新刊コーナー

青ノ果テ

花巻農芸高校地学部 of 夏

伊予原新著
新潮文庫 nex

カムパネルラが死んだ場所で、彼女は消えた。まだ見ぬ青の果てを探するために――。

舞台は花巻。宮沢賢治のゆかりの地だ。彼を「賢治先生」と呼ぶ慣しがある、「花巻農芸高校」で物語は始まる。ある朝、主人公の壮多のクラスに、見知らぬ男子がやって来る。風の又三郎？ ただの転校生？ 東京からやってきたと言う彼は、宮沢賢治が嫌いだと言う。その後、壮多と転校生の深澤、壮多の幼なじみの七夏は、新設された地学部に入部し、「イーハトーブはどこか？」という題で巡検を行う計画を立てる。しかし、巡検の直前に七夏は姿を消してしまふ。

カムパネルラが死なない世界って、どこにあるのかな。失踪前に、七夏はそう悩んでいた。そして壮多は、カムパネルラが死なない『銀河鉄道の夜』の異稿が存在し、その

異稿を深澤が七夏に渡していたことを知る。深澤は何者なのか？ 七夏はどこに行ったのか？ 謎は深まるばかりだ。その謎を抱えたまま、壮多は深澤と巡検の旅に出る。イーハトーブと七夏を探すために……。

本書のタイトルでもある「青の果て」は、賢治の「オホーツク挽歌」から取られている。この世とあの世の境目を表すのだそうだ。地学部の彼らが見つけた「青の果て」は、生命の輝きでもあり、青春の輝きでもあった。「カムパネルラ、ぼくたち一緒に行くつねえ」……。彼らの上には今夜も「青」が広がり、銀河鉄道が空を駆け回る。

(二八六頁 本体六三〇円 1月刊)

(出席点)

No One Is Too Small
to Make a DifferenceGreta Thunberg 著
Penguin Books

若き気候活動家

グレタ・トゥーン

ベリーの演説集の増補版である。収録

作の半数は邦訳が



『グレタ たったひとりのストライキ』(海と月社)に掲載されているが、彼女の言葉は英語原文で味読するに値するものだ。

グレタは、気候変動の絶望的な展望と、過去から現在に至る世界の無為無策を、時に IPCC 報告書の頁数までも参照しつつ具体的な数字を挙げて批判する。しかし、支持者にもしばしば見られる、もっぱら科学の代弁者とみなすグレタ像は、彼女の一面しか捉えていない。科学は知見を語るが、正義をもたらしすことはない。グレタは「悔い改めよ」と宣傳伝える終末論的預言者のごとく、一方で政財界とマスコミに厳しく迫り、他方で市民に市民的不服従を扇動する。また、気候の壊滅的な破壊がなされた未来の視点から語られる主張は、現代思想的にはジャン・ピアール・デュビュイが提唱する「啓蒙カタストロフィスム」の見事すぎる実践例だともいえる。

グレタが一貫して要求する「危機を危機として扱う」とは、優れて認識的かつ実践的な課題である。グリーン・ウォッシュされた社会によって隠された世界の実相を見透す洞察は、全世界の社会システムのラディカルな変革と結びつく。「エコロジー」の語源が「家(オイコス)」であることを思い起こしながら、グレタの言葉に耳を傾けよう。「私たちの家が燃えている」。認識と実践のアクチュアルな統一をこれほど端的に表現した言葉が他にあるだろうか。

(一二二頁 本体一〇ドル 11月刊)

(霊人)

一粒の柿の種
科学と文化を語る渡辺政隆著
岩波現代文庫

現代の生活を可

能にしているのは、
明らかに科学であ
る。しかし、その
重要性の反面、さ

ほど親しみを持たれていないのも事実であらう。科学は勉強の対象になりえても、楽しむものであるとはあまり認識されていない。その面白さを知るには、実利を離れた場所で科学に触れることが必要である。

科学を楽しむための第一歩として、本書は非常に優れた一冊である。内容としては科学とその社会におけるあり方について語ったエッセイ集であるが、軽妙洒落な筆致もあいまって、テーマから予想されるよりもはるかに親しみやすい。タイトルの出典である寺田寅彦からクローン羊まで、話の「ネタ」は多岐にわたる。読み物としての魅力も大きい本書であるが、最大の特徴は、いかに多くの人と一緒に科学を楽しむか、という意識がその語りに通底している点だろう。本文中でも指摘されていることであるが、科学について専門

家が「一般」の人々に向けて語る際、それは一方的な知識の伝達に陥りがちである。しかし、そこで目指すべきは一緒になって面白がることなのである。本書はそうした試みの実例としての価値も大きいと思われる。昨今、大学院生も含め研究者にはいわゆるアウトリーチ活動が推奨されているが、そのうまくい方法が分からず悩んでいる人にとって参考になる記述も多い。

科学が好きな人というよりも、むしろ、自分には縁遠いと思っている人こそ本書を薦めたい。必ず発見があるはずだ。(藤餅)

(二五八頁 本体一〇四〇円 2月刊)

風

ロマン・ガリ著
永田千奈訳
共和国

本書は、戦後を代表するフランス語作家ロマン・ガリの最後の長編小説である。物語の

舞台は主として第二次世界大戦前後のフランス。リュド(ウィック)・フルリの少年時代から青年期にかけての恋愛や成長が描かれて

いる。

リュドとポーランド貴族フロニキ家の令嬢リラとの恋愛は、本作の序盤から終盤まで予断を許さない。身分格差や戦争による別離があるからだ。戦争の渦中にあるリラの救助や支援に必死なリュドの姿勢は、少なからず胸をうつものがある。

その過程でレジスタンス活動に参加したリュドは加速度的に成長していく。その陰には周囲の人々の助力がある。叔父兼育て親で風製作・風揚げ名人のアンフロワーズ、《クロ・ジョリ》の料理人ドゥブラ、レジスタンス女性活動家エスピノザ。彼らの言動は、悩めるリュドの指針となる。

他にも本書で見逃せないのは、「フランス善／ナチス悪」という構図が必ずしも成立しないことを示している点だ。例えば、解放後の描写では、対独協力者とみなされたリラがフランス人によって丸刈りにされる。フランス人がナチスに向けていた憎悪を内部の他者に向けた瞬間である。憎悪の対象は、リュドが述べているように、「歴史のなかでの役回りというだけ」にすぎない。

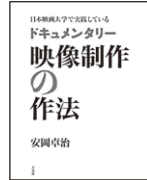
第二次世界大戦期の人々が何を考え、どう行動したのか。本書を読むと、その一端が垣間見えて、興味深い。(モロイ)

(二二六頁 本体二七〇〇円 2月刊)

日本映画大学で実践しているドキュメンタリー映像制作の作法

安岡卓治著 玄光社

すっかり一般的な存在となったYouTube。その中には、ドキュメンタリー的な動画をアップする者も増えてきた。しかし、現状ではただ撮影した素材をトリミングしただけの動画も多い。ドキュメンタリー映画は事実の羅列ではなく、意図を持って編まれる物語なのだ。



本書の著者は、『ゆきゆきて、神軍』（原一男監督）に助監督として参加し、『A』（森達也監督）などでプロデューサーを務めつつ、日本映画大学教授としてドキュメンタリー制作者を育成している安岡卓治である。そのため、本書は安岡自身の映画論や制作・製作経験と、実践的な映像制作のバランスが取れている。第一章、第六章では、卒業制作の指導などの日本映画大学における指導経験や、先述したような作品の制作・製作経験を語っている。第二章から第五章にかけては、自身の経験を具体例として引用しつつ、企画・撮

影・インタビュ・編集の実践的な方法を論じている。「伝えたいことから企画は始まる」「意図を持って撮影に臨め」「徹底的にリサーチをしてインタビュしろ」「見せ場と聞かせどころを意識してストーリーを編め」などといった、ドキュメンタリー映画を制作していく上での要点が押さえられ、「映像」「映画」にしていく過程が見えてくる。撮れた映像を並べるだけでは、一つ一つの「事実」を提示するだけであり、そこには「真実」は宿らない。YouTubeの動画が好きなら人にこそぜひ読んで欲しい。（石透）

（二四〇頁 本体二〇〇〇円 10月刊）

新装版 ポール・オースターが朗読するナショナル・ストーリー・プロジェクト

ポール・オースター 編
柴田元幸他訳 アルク



物語を朗読で聞くこと、別の側面が浮かび上がる。細かな息遣い、小さな抑揚、僅かな沈黙。音声に変換された文字は息を吹き返し心地よいリズムを頭に刻む。物語は口承で伝えられてきた、その必然性が分かる気がする。

本書の収録するナショナル・ストーリー・プロジェクトは、ポール・オースターが一九九九年の一〇月にラジオ番組で始めたものだ。事実であること、短くあることという以外に制約をつけないで物語を募集したオースターは五〇〇通以上の手紙を受け取った。邦訳が出たのは二〇〇五年、一五年の時を経て新装版として出た本書を読むと物語の著者の多くはもうこの世にいないのではないかと想像してしまふ。それほど第二次世界大戦も、ベトナム戦争も遠くなった。だからこそ今あらためて聞かなくてはならない。

個々の物語もそうだが、やはり本書の魅力はオースターの朗読ではないかと思う。オースターは著者ではない。編者として手紙を読み朗読するだけだ。なのに何故だろう、はがゆくも儚いオースターの世界観、喪失と回想を繰り返すあの空気が頭に浮かぶのだ。優れた作家が優れた朗読者である必然性はないが、オースターはこの二つを兼ね備えた人物なのだろう。彼の声だからこそ、このプロジェクトはあれほどの質と量を兼ね備えた。リスニングの教材に飽きたらこの本を買ってみるといい。英語の練習としてだけでなく、アメリカという国の声がこの本を通して聞けるかもしれない。（きも）

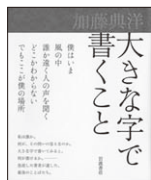
（二三五頁 本体二二〇〇円 12月刊）

大きな字で書くこと

加藤典洋著

岩波書店

本書は昨年五月に急逝した加藤典洋が、岩波『図書』と信濃毎日新聞に連載した文章を編



んだ本であり、小部ながら、加藤の思想、文学性と人となりがよく表れた一冊である。

加藤については、『敗戦後論』と、それが引き起こした論争が、まず想起されることが多い。しかし、加藤は、第一に優れた文学者だった。本書の第一章には岩波『図書』に連載されたエッセーが収められているが、その行間は深く、余白に満ち、繊細さと深い文学性を湛える。例えば、それは、多田道太郎の長女、瑤子の葬儀後、居酒屋での多田と藤田省三とのエピソード（三七〜三九頁）などに端的に表れている。それは、同時に、悲しみと嘆きを通奏低音としながら、しかし、感傷主義に堕さない加藤の含羞を体現している。

また、加藤は、明治学院大学での授業をまとめた名著、『言語表現法講義』の著者としても知られる。加藤は決して一方面的指導を

行わず、学生の生まれ出でる言葉等待つ、優れた教育者でもあった。それは、本書の端々にも表れている。例えば、本書で加藤はサリンジャーに言及した上で、以下のように語る。「辛抱強く『手出しせず』に『見守る』うちに、教える側も、何かを学ぶ。教えることが本来、双方向なものであることを、その『待つこと』は私たちに教えてよこすのである」（一四四〜一四五頁）。本書には、文学を起点に、深い思索・活動を行った加藤の魅力が詰まっている。より深く生きたい読者諸氏にお勧めの一冊である。（投稿・行人）

（一四九頁 本体一八〇〇円 11月刊）

現代哲学のキーコンセプト
因果性ダグラス・クタツチ著
相松慎也訳 岩波書店

「因果性」という言葉はあまり身近なものではないかもしれない。だが、「どうして?」

という問いかけや、「〜だから」「〜のせい」という発語は日常にありふれている。原因や結果の概念は説明や予測、あるいは責任帰属

の根幹となっており、認識も行為も因果性なしには成り立たない。空気と同じで目に見えないから、普段は意識されないだけなのだ。

この本は因果性について、どのような説明がなされており、どのような批判があるか、二一世紀の分析哲学の観点から概観するものだ（「存じないかもしれないが、哲学は今世紀も進展している」。言ってしまうえば、どの理論も最終的には「長一短で、因果性とは何かを単独で説明できるものはない。けれども、私たちが何気なく使っている概念の複雑さに気づけることにこそ、本書を読む意義がある。確率概念を用いた理論もあり、自然科学を専攻する人が読む哲学の本としても推薦できる。ただし、文章は明確だが、この分野に詳しくない人にとってすら読めるような本ではない。哲学者たちの長年にわたる思考が圧縮されているからだ。乾燥わかめを水でもどすように、読みながらそのつど身の回りの事例に当てはめて「もどす」必要がある。そうしてこの本にどれだけ多くのことが書かれていたかわかるころには、世界の見えかたが少しだけ変わっているだろう。（投稿・u-i）

（二二頁 本体二四〇〇円 12月刊）



古代寺院

新たに見えてきた生活と文化

吉村武彦ほか編

岩波書店

京都での新生活

が始まり、新たな
趣味を探すもの
もいよう。その一
つに寺院めぐりがあ

るうが、感得する能力にこれほど差があるものも珍しい。長期の修行を「易行」に変えられるような都合のよい本はないものだろうか。仏像紹介などは甚に数多あるが、今回は趣向の異なるものを紹介したい。本書『寺院社会』は岩波書店「古代史をひらく」シリーズ

の一である。本書の吉川真司をはじめ編者は文献史家だが、執筆者には考古・建築・美術の各分野の精鋭が結集し、さまざまな観点から古代寺院を紹介する。考古学の見地からの未発見寺院の見つけ方、寺院社会の変化と伽藍配置や寺院建築の変化とを結びつける文献史学の知見、それらが美術や建築のような現用の物質を扱う学と融合することが読者に有機的な寺院像を伝えることを可能にしている。学際性なら他の古代史シリーズものと同じではないか、という通人には本書のもう一つ

の意義をお伝えしよう。それは巻末に収録される対談である。各自の研究の志望動機から国家仏教論の是非まで大家が縦横無尽に語りつくす対談は研究入門としても相応のレベルをもち、本書の紙価を高めている。各稿の脚注も充実し、研究入門としても質は高い。

寺めぐりのお供にも日本古代史入門にも幅広い需要に広く推奨したい。なお、考古学中心の巻は既刊だが、本シリーズのアンカーには「国風文化」が控える。京洛を楽しむツールがまた一つ増えるのも、あわせて心待ちにしたい。

(三六四頁 本体二六〇〇円 12月刊)

(投稿・千広)

連続と断絶

ホワイトヘッドの哲学

飯盛元章著

人文書院



本書は、新実在論の紹介でも知られる新進気鋭の研究者の博士論文を基にした単著である。著者の試みは、二〇世紀思想の異端児ホワイトヘッドの哲学を現代思想と対決させ、その深みを詳らかにすることである。

言語や文化の相対性に重きを置く二〇世紀後半の哲学潮流の中で、宇宙全体を説明しようとするホワイトヘッドの壮大な形而上学的構想は旗色が悪かったが、ここ最近では、言語から脱出し、その外部に存在するはずの諸対象へと至ろうとする新実在論の牽引者ハーマンによって、再評価されている。ただし、

ハーマンは彼の形而上学的体系性を肯定しつつも、個体を全て関係の「帝国」に解消してしまう面があることには否定的で、いわば「連続」にたいして「断絶」を強調するわけだが、筆者はさらにその先へと読者を導く。本書は、ハーマンが称揚する個体のダイナミズムを成立させる、それ以前の「断絶」の諸相をホワイトヘッドの思想から内在的に分析し、むしろ「断絶」こそが「連続」を可能にする二項対立を脱却する道筋を示そうとしている。いわば、ギリシア神話で描かれる原初のカオスのように、全ての存在がそこから溢れ出てくる豊饒な闇の次元を、筆者は「存在の深み」として主題化しているのだ。

巻末に収録されている詳細な用語辞典も相俟って、本書はホワイトヘッド研究の最先端というだけでなく、見事な入門書にもなっている。

(三三三頁 本体四五〇〇円 1月刊)

(投稿・NN)

新実存主義

マルクス・ガブリエル著
廣瀬寛記 岩波新書

まず断っておく必要があると思うが、本書はマルクス・ガブリエル一人の筆になるものではない。第一章で示された彼の主張に、序論、第二・三・四章で他の哲学者が考察を加え、それに最終章でマルクス自身が応答するという形式である。テーマは「心」だ。

「新実存主義」とは、『心』という、突き詰めてみれば乱雑そのものというしかない包括的用語に対する、一個の現象や実在などありはしないという見解である。こう打ち出した著者は人間だけに備わるとされる「心」の働きをより明確にするため「精神」の言葉に置きなおす。では「精神」の在処はどこか？ 脳と一体化しているという自然主義の見方を批判的に捉え直しながら、著者は「自転車とサイクリング」という独自の例を挙げて「心」の実存について検討を行う。そして「精神」の在処がどこか？ という問いそのものを問い直す。

「ありはしない」のが証明し得るのかどうか、本書にはないが、自然主義の立場からの反論が待たれる論考である。（ねこ）

（二二四頁 本体八〇〇円 1月刊）

コラボー対独協力者の粛清

マルク・ベルジエール著
宇京頼三訳 白水社文庫クセジュ

本書は、ナチス・ドイツへの協力者（一般に「コラボ」と呼ばれる）に対する戦後フランスにおける粛清を描いている。

フランスにおけるコラボへの粛清は、必ずしも中央権力が行っていたわけではない。ノルマンディー上陸作戦実施後から一九四四年夏までの間に、非合法ではあるが正当である多くの者が感じる処刑の多くが行われていたからである。非合法とはいえ、このような処刑は極めて組織的であり、時に半公式的な性格さえ与えられていた。

その一例として、「コラボ」とされた女性たちが丸刈りにされたことが挙げられる。この女性たちは、レジスタンスのフランス国内軍によって徹底的に探索され、一つの場所に集められた人々である。この処罰はしばしば裁判抜きで行われた。この事実だけでも、この時期のフランスがいかに常軌を逸していたか理解できるだろう。

これまで焦点が十分に当てられることがなかった、対独協力者への粛清のもたらした凄惨さ、苛烈さが理解できる一冊。（モロイ）

（一五六頁 本体二二〇円 11月刊）

ハーレクイン・ロマンス

恋愛小説から読むアメリカ
尾崎俊介著 平凡社新書

ハーレクイン・ロマンス——世界一四四か国で読まれ累計六七億部を売り上げる、ロマンス小説の代表格。かくも絶大な人気を誇る理由の一つは、読者と作者の距離の近さにあると著者はいう。どうだろうか。

もともとハーレクイン社は、ハードカバーをペーパーバックにリプリントする出版社としてカナダで発足し、のちにアメリカに進出した。初期のハーレクイン・ロマンスは、イギリスのミルズ&ブーン社のロマンス叢書をペーパーバック化したものである。このロマンス叢書の作者はほとんどが女性であり、しかも投稿によってデビューした人の数も多かった。ハーレクイン社もこうした方針を引き継ぎ、女性のアマチュア作家から広く投稿を募って新人を発掘している。熱心な読者が作者に転じる道が開かれていること、つまり女性が書き女性が読むものとして特化した作品であることこそ、何よりの魅力なのだ。

英米の出版史や読書史、文学史の観点がふんだんに盛りこまれた本書。ロマンス小説に馴染みがなくても面白く読める。（ミセ）

（二二五頁 本体八八〇円 12月刊）

いじは自由の風が吹く場所、遊戯の音楽が流れる居場所。

「受験が終わったら思いっきり遊んでやる！」そんな意気込みで大学生活を迎える新入生も多いだろう。時間も場所も人脈も、大学は遊ぶことに適している。しかしどうせ思いっきり遊ぶならば、「遊びとは何か」を考えてみてはどうだろう。「遊んでばかりいるんじゃない」と注意されたらこう言い返してやれ。「遊びこそが自由の醍醐味なのだ」と。

文化とは遊びだった。

遊びに関する書物で最も欠かせないのはホイジンガ著『ホモ・ルーデンス』（中公文庫）だ。二〇世紀を代表する文化史家ホイジンガが分野横断的に遊びについて考察した本書。《自由な諸個人が、限定的なルールを用いて、日常から乖離した空間を形成する》、遊びの本質をこう定義していくホイジンガは一見遊びとは無関係に思える法律、戦争、知識にも遊びの萌芽を見出していく。

個々の章もいいが、最終章において時代分析として一九世紀以降を遊びが喪われていく時代として記述していく様が面白い。遊びの側面が捨てられ真面目に支配されていく現代を悲観的に記述するホイジンガは、世界大戦の中で亡くなっていった。社会を形作る制度や学問にも遊びの側面を見出しながら、遊びの喪失まで考えるホイジンガの分析から、自由と遊びの関連を考えてもいいだろう。

また『ホモ・ルーデンス』と並んで遊びの古典と称される本と言えば、ロジェ・カイヨワ著『遊びと人間』（講談社学術文庫）だ。ホイジンガの枠組みに批判的検討を加えながら遊びの概念を構築していくカイヨワは、ホイジンガが「ルールに基づく競技としての遊び」を強調しすぎていると指摘する。カイヨワはスポーツのような

①「競技」、ギャンブルのような②「運」というだけでなく、ごく遊びのような③「演技」、そして純粹に酩酊を味わう④眩暈として、遊びを分類する。そして人類が文明社会に移る中で、眩暈としての遊びは禁じられ、競技としての遊びが尊ばれていくと指摘する。何故社会はオリンピックを尊びドラッグを禁止するのか。競技としてのダンスを教え、路上のダンスを取り締まるのか。カイヨワの分析は現代社会でもその輝きを失っていない。

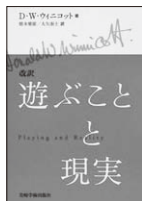
自立と自由のための遊び

最後に紹介したいのはD・W・ウィニコット著『改訳 遊ぶことと現実』（岩崎学術出版社）。精神科医として著名なウィニコットは「精神分析は遊ぶことの特異な形式」と述べた。幼児が母親から離れていくためには、遊びを必要とする。ウィニコットは、依存から自立する過程の中に遊びを位置づける。

遊びは主体的行為でありながら、幼児はその遊びを親に《見守られること》を必要とする。自分の世界に没頭しながら、その没頭を見守る視線を求めている。この視線が内的に安定した時、人は一人で居る力が身に着く。セラピストにおける聞くことの重要性、教育における見守ることの重要性とは、その人が自由になるための手助けなのだ。

遊ぶことで人は自由になり、遊ぶことで社会は多様になる。大学というのは、一生遊び続けるための訓練の場所かもしれない。是非自分の好奇心を大事にして、人生を謳歌してくれ。

（きもの）



史的物活論?——エルンスト・ブロッホと梯明秀

気候危機や原発問題などの環境問題に抜本的に取り組むには、資本主義の問題は避けて通れない。近年、エコ社会主義が有力な時代思潮となっているのも当然であろう。しかし、その根底に据えられべき自然哲学については、また様々に問い直し、探究を積み重ねている段階だといえる。ここでは二人のマルクス主義哲学者、エルンスト・ブロッホと梯明秀を紹介しよう。その本質的特徴を掴むにはマルクス主義思想史における位置づけの検討が必須となるが、紙幅の都合上割愛し、二人の学説のラフな略解に留めた。

マルクス主義の自然観とはいえば、自然弁証法にまつわる複雑な論争史があり、一概に言うことは困難である。では、物質概念はどうかといえは、マルクス主義の公式的な唯物論によれば、物質とは客観的実在であり、意識はその反映である。ブロッホと梯はそれを踏まえながらも、互いに影響関係無しに、物質および自然における主体性の契機を強調したという思想的共通性をもつ。

エルンスト・ブロッホにおいては、物質が彼の鍵概念であるユートピアと結びつく文脈で、自然主体の概念が説かれる。他の著作でも類似の内容が論じられているが、さしあたり重要著作の『チュービンゲン哲学入門』（法政大学出版局）を挙げよう。ブロッホは独自の視点から博覧強記を発揮して、ロマン主義的すなわち質的・有機的な物質概念・自然観の思想史を辿り、その系譜を「アリストテレス左派」と名付ける。その狙いは、アリストテレスの質料概念を「可能性（デユナミス）」を強調して読み替え、物質をいまだ存在しないユートピアの可能性の基体として捉えることにある。

京都学派左派に位置づけられる経済哲学者の梯明秀については、

近年出版された中島吉弘によるモノグラフ『梯明秀の物質哲学』（未來社）が参考になる。梯はヘーゲル論理学とそのイデアをレーニンの「物質の哲学的概念」によって読み替え、天体史から生物史へ、さらに社会史へと展開する「主体的物質」の概念を構築する。梯には西田哲学との格闘という軸もあるが、興味深いことにそこでの論点はブロッホと同様にアリストテレス解釈である。梯はアリストテレスの基体概念に、潜在的（可能的）質料の現実的形相への主体的自己展開を読み込む。やはりここでもデユナミスが鍵である。

ブロッホと梯に共通する物質理解を特徴づけるとすれば、（マルクス主義的な意味で）形而上学的な物活論ではないにせよ、史的過程において弁証法的に捉えられた一種の物活論だといえようか。この二人の哲学者については、服部健二が既に『西田哲学と左派の人たち』（こぶし書房）内で比較・検討し、先駆的にもエコロジーの観点から評価している。しかし、エコ社会主義の立場から手放して二人に賛同することはできない。たとえばブロッホは原子力の平和利用の可能性に「希望」を見出していたし、梯も無邪気に原子力の利用を自然の本質的な潜在力の意識的現実化として捉えていた。とはいえ、一九八〇年代の日本の反原発運動の文化背景が「革マル派と毛沢東派の両輪によって、それも前者のヘゲモニーで形成された」ことを喝破した桂秀実の『反原発の思想史』（筑摩選書）は、梯哲学に疎外論を導入すれば、エコロジー主義に転化するを指摘している。そして実際に梯哲学は革マル派に多大な影響を及ぼした。桂の趣意とは異なるだろうが、ブロッホと梯にエコ社会主義の可能性を見出さんとするならば、欠くべからざる論点である。（靈人）

編集後記

およそ五年のあいだ編集委員を務めてきましたが、今月号で卒業となります。はじめは書評の方法がよく分からず、試行錯誤を繰り返しておりました。とはいえ、これだけの期間書き続けていると、相当に慣れるものです。今から考えるとだいぶ遠い道のりを来たように感じています。

編集委員として最後に執筆する「後記」では回顧的なことを書くことが多いのですが、あえてそうではなく、今後について考えてみたいと思います。紙の書籍は電子書籍に駆逐されるという観測もありました。しかし、今も健在で、本誌に電子書籍のコーナーができるのは遠い将来のことになりそうです。それよりも問題なのは書店の方でしょう。人々が本を買わなくなったといわれておりますが、これは文化的なものよりも、可処分所得の減少が原因としては大きそうです。本誌の命運もまた日本経済の盛衰に依るのでしょうか。

さて、こう考えてみたところでやはり見通しは不透明です。しかし、本を評するという営為自体の重要性は、今後も変わらないように思われます。『綴葉』が続くことを祈りつつ、筆を擱きたいと思います。(藤餅)

当てよう! 図書カード

特集「故郷」、いかがでしたでしょうか。編集委員それぞれの故郷を扱った本から故郷というテーマそのものについて考えるきっかけになる本まで、幅広く取り上げました。今回は特集「故郷」に絡めた出題です。本号の特集のなかで、登場していない都道府県は次のうちどれでしょうか。

1. 香川県
2. 青森県
3. 栃木県
4. 東京都

(ミセ)

《応募方法》読者カードに答えを書いて生協のひとことポストに入れてください(またはe-mail:teiyo@s-coop.net)。正解者の中から抽選で5名の方に図書カードを進呈いたします。締切りは5月15日です。

12月号の解答

12月号「レヴィナスが『困難な自由』のなかで反旧約聖書的性格を批判した人物は?」の解答は、2. シモーヌ・ヴェイユでした。応募者13名中9名の方が正解でした。多数のご応募ありがとうございます。図書カードの当選者は、やまさんさん、ハードラーさん、Sosoさん、いよしさん、metさん(順不同)です。おめでとうございます。(モロイ)

読者がらひつじ

○「あなたの書評が見てみたい」特集とても面白かったです。一歩引いて評している(気がする)感じがむしろ好き。(農・met)

○「あなたの書評が見てみたい」は本心に羨ましい贅沢な企画ですね。続けて読むと何となく皆さんの専門や興味を予測して、「今後取り上げてほしい本」を書く時は「あの方が紹介してくれないかな」と想像しそうですわくわくします。(防災研・水仙)

——初めての試みでしたが、好評だったようで何よりです。編集委員も相手にどういう本を読んでもらおうかと、阿吽の呼吸をはかって(いたと思うのですが)、選書しておりました。そして、読者カードにある「最近読んだ面白かった本」や「今後取り上げてほしい本」の書き込み、実は結構読むのを楽しみにしています。よろしければ今後もカードをお寄せください。

○今回初めて読ませていただきました。今後またのしみにしています。(文・やまさん)——初めまして『綴葉』といます。ほぼ毎月刊行しておりますので、授業の合間に、ご飯のお供に、目を通して頂ければ幸いです。四月からどうぞよろしく。(ねい)